

## 宿場町寸話

### 5. 東海道枚方宿五十六次 (3)

2025 年 10 月 4 日

堀家 啓男

#### 3. 品川宿から守口宿までの五十七次が東海道

宝暦八年（1758）大目付依田和泉守の問い合わせに道中奉行所御勘定の谷金十郎は「東海道品川より守口迄」と文書回答しています。

寛政元年（1789）、土佐藩から東海道筋についての問い合わせに対して道中奉行は「近江路を通り伏見、淀、枚方、守口までのほかは是無き」と文書回答しています。（参考 「東海道枚方宿と淀川」 中島三佳著）

東海道は品川宿から五十七次目の守口宿までということで、枚方宿は五十六次目でした。但し、東海道を所管した道中奉行のマニュアル「道中方覚書」には品川宿から守口宿まで「東海道は江戸より大坂迄馬継五十六ヶ宿外人足役壱宿（注 守口宿は人足役のみでした）」の五十七宿と、品川宿から大津までの五十三次を併記しています。京都までの五十三次が先行したことや、平和な時代が訪れた江戸中期に旅ブームとなり、浮世絵の「東海道五十三次」（安藤広重作）が大流行し五十三次が、一般に定着したことが東海道五十三次の強いイメージをつくりました。このため現在でも「東海道は五十三次」と呼ぶ人が多いようです。

近世を通じて枚方宿が受発した公文書は「東海道枚方宿」と明記し、宿役人はもちろん、幕府等の発信人も枚方宿が東海道の宿であることを認識していました。

（参考 「近世交通史資料集巻10」 吉川弘文館 「枚方市史第3巻」 枚方市）

なお、宿が受発する公文書では「枚方宿」や「東海道枚方宿」と慣用し、「牧（まき）」と書き、「ひら」と読みました。旅ブームで発行された旅行案内でもすべて「枚方」と記され、常用されていました。「まきかたちやいまっせ」ほんまに。

「枚方寺内」の住職実従が残した日記「私心記」でも「枚方」を使っていたので、すでに戦国末期にも慣用されていたのかもしれませんが。明治に入っても明治9年（1877）の枚方小学校の卒業証書で「枚方小学」と書かれていました。10年代には枚方に統一されたようですが、その後もなかなか行きわたらず混用されています。

◎枚方宿東見附 新町1丁目 枚方市駅北口下車、北へ徒歩約8分

同西見附 堤町 枚方公園駅下車、北へ徒歩約5分

同本陣跡 三矢町 両見附から旧街道筋徒歩約20分